北海道大学附属図書館報

楡蔭

The Hokkaido University Library Bulletin No. 74 Feb. 1988

目　次

○ライブラリー雑感
獣医学部長　波岡茂郎 …… 1
○ハーバード大学の図書館と図書館員
文学部助教授　南部　舜 …… 3
○北の古典籍②　秋月俊幸 …… 5
○昭和62年度補正予算における
外国学術図書の購入について …… 7
○会　議 …… 8
○研　修 …… 9
第一回国立大学図書館協議会シンポジウム
に参加して　村上　豊 …… 9
NACSIS と CLARK との間で　菅原英一 …… 10
○電算化ニュース …… 12
○受贈図書 …… 15
○人事往来 …… 15

ライブラリー雑感

獣医学部長　波岡茂郎

ある大学なり研究所の業績を評価する場合，そこにある図書館の規模とその利用状況を調べると大体見当がつくといわれております。私の恩師故平戸勝七先生がかつて学生の私共にしばしばギリシヤの哲人の言葉“ιH σοφιας πηγη δια βιβλιωυ ρεει”（知識ノ泉ハ文献ヲ通シテ流レル）を引用され，文献収集が如何に研究上重要かを力説されました。図書館という言葉の響きは，いかにも本が倉庫に収納されているという感じがしますが，これがライブラリーとなると，毎日いきいきと多角的に利用されるという雰囲気がかもしだされるのも妙です。

戦前戦後わが国における図書館の実態は欧米のそれに比べると1，2を除いてまことにお粗末でした。私は昭和27年農学部を卒業して農水省の某研究所に勤めましたが，ここの図書館はバラック同然でしかも外国雑誌の大部分に欠巻があり到底利用に価する場ではありませんでした。したがって多くの時間は接写レンズをつけたカメラと三脚をかついであちこちの大学，研究所をめぐり歩くことに費された始末でした。帰り着いてすぐに暗室に飛び込み，現像，焼付けをしたものを自宅に持ち帰って夜が更けるまで読むというのが当時の多くの研究者の日課だったのではないでしょうか。当時広島に米軍の原爆医学研究のためのABCCなる研究所があって，そこにはわが国の医学・生物学関係の図書とは比べものにならないぐらいの文献が整備されており，東京都内のどこにもない文献はそこで借ることが一般的でありました。これをもって当時ライブラ

リーの完備なくして良い研究は出来ないとつくづくその内容の差を歎じたものであります。

当時はライブラリーに対する概念が欧米とわが国ではかなり異なっていたのではないかと思われます。すでに欧米では図書分類法も発達しており，一定の資格を持ったライブラリアンという専門家が合理的な図書の運営管理を行っておりました。しかしわが国でも次第にそのことの重要性が認識され，戦後しばらくして図書専門のコースを置く大学も現われ，図書館の規模や運営も欧米並みになってきたことは喜ばしい次第です。

わが国ではしばしば東京でないと情報不足になり，地方では最新の情報と称するものが少くとも半年は遅れるというようなことが云われています。しかし私は，これは大変おかしなことだとかねがね思っており，情報というものは常に活字として流通しているわけですから，もしある情報に不足して不便を感ずる事態があるとすればそれはその情報を入手するレセプターに問題があるわけです。またまた米国の例を引いて恐縮ですが，米国の大学，研究所（附属病院を除いて）はほとんどが片田舎に存在しています。これは取りもなおさず情報入手に何の不便も感じていないからにほかなりません。しかし，昨今わが国でもオンラインシステムやデータベースの発達によって中央と地方の差がなくなってきたことはまことに喜ばしい次第です。反面，これをどう利用するかについては未だ問題が多いように思われます。

私は今を去る25年程前にコーネル大学に留学したことがありましたが，行って早々きわめて印象的だったのはそこの図書館の巨大さと利用度の高さでした。夜中の12時まで煌々と電気がついているのです。多くの学生は夜半まで図書館を利用しそこで勉強し，夜中の12時頃アパートへ帰ってきます。そして翌朝は7時半頃から登校するといった日課です。わが北大の図書館も毎年多角的に充実してきたことはまことに喜ばしいことですが，それと同時にその利用率，利用法もこれに平行して充実しなければならないのは当然です。

たとえば獣医学部の学生は午後の実習が，5時から6時頃になることがしばしばありますが，これが終ってから図書室を夜利用出来ないことに不満があります。ライブラリーの充実はその利用時間，利用率の充実と不可分の関係にあるのではないでしょうか。さもなければ情報は消化不良を起してしまいます。ライブラリーというものは日中の種々の業務から開放されたあとにもっとも効率良く利用される場ではないでしょうか。ここに米国と日本のライブラリーにかかわる認識の差があると思います。これには管理運営上の人の問題，図書館員の定員の問題，超過勤務の問題など，それを実行するに当って大変多くの難問があろうかと思われます。しかし私はいつも大学のキャンパスが夜の寝りについて寂寞とした中に煌々とした灯によって独り活気を帯びたコーネル大学の図書館を思い出さずにはおられません。ライブラリーは生き物です。日本人は働き蜂と云われて久しいようですがライブラリーの利用時間および利用率の向上についても大いに検討していただきたいと願って止みません。

Library

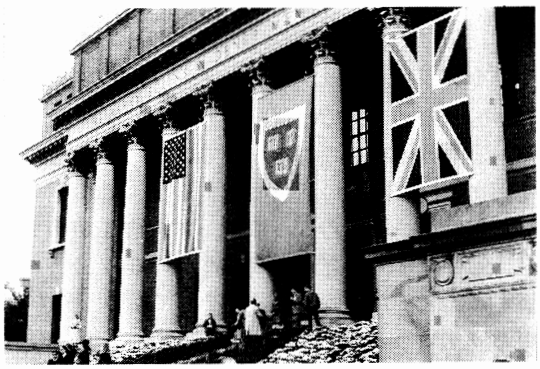
Library

ハーバード大学の図書館と図書館員

文学部助教授　南部　舜

1986年9月11日，我々，韓国・中国・日本の訪問学者（Visiting Scholars to Harvard-Yenching Institute）数人は，ハーバード大学の中心部にあるワイドナー図書館のホールに集合した。9月4日には，イギリスのチャールズ皇太子がこの大学の350年祭に講演に来て，この図書館を控え室にしたのだが，既に何もかも片付いていた。10時半から，図書館のガイダンスをしてもらうことになっており，やがて，私にはいかにもアメリカ的かつ知的な風貌に見えた図書館員（ライブレアリアン）Len氏がやってきて，中を案内し，特に検索システムを中心に熱心に説明してくれる。このワイドナー図書館はいわば中央図書館で，全学すべての図書が登録されており，まず，自分の見たい本が学内のどこの図書館にあるかを知るべし，と言う。実際，ハーバード大ではいたるところに立派な図書館があり，大学の建物群をながめていると，図書館は研究所・博物館・美術館・学生寮・講義棟（ホール）などと堂々肩を並べている。このワイドナー図書館自体も，ギリシア神殿風の1913年に建てられた大建築で，ここだけでも一体どれほどの蔵書があるのか見当もつかない。それだけに図書の整備・配列には大変な神経を使っているように見えた。何といってもカウンターの向こうにいる職員の数が多いし，ぎっしり並んだカードボックスの数も大変なものだが，天井が高いのであまり圧迫感はない。私が感心したのは，B5版くらいの薄くて青いプラスチック版を検索版にしているやり方で，よく見ると極小のローマ字らしきものがびっしり並んでおり，学生達は次々とこれを強力拡大鏡つきの器械に押し込んで光をあててのぞいている。Len氏の説明によると，このプラスチック版一枚でカード何百枚分もの図書を登録できるのだ，このごろはカードボックスが場所を占拠しすぎるのでこの方法も採用している，という。

さて，英語をききとるのが苦手な私は，氏が他の訪問学者と話している間にあらためて図書館内部をながめまわした。大きな壁画があり，戦場へむかう兵士達を天使が激励している図である。第一次大戦で欧州へ赴いた若者達を描いているらしい。そういえば，この図書館から100Mほど離れて相対する形式で記念教会（メモーリアル・チャーチ）が建てられており，第一次大戦で戦没したハーバード卒業生の氏名が一人一人，金文字で刻まれている。広々とした図書館内は実に静かで，いたるところにあるソファでくつろぎながら（といっても禁煙だが）雑誌を見る学生，大テーブルで研究書らしきものを読む学生，カウンターの所で何かひそひそ相談しているらしい教官風の人物，と様々である。「広いとは，こんなに気分の良いものなのか！」と改めて感じる。天井が高いので，なおそう感じるらしい。



ワイドナー図書館
1986年9月4日，350年記念祭
（チャールズ皇太子来学）

一時間ごとに時を告げる記念教会の鐘の音

をききながら館外に出て，となりにあるピュージー図書館へ入る。Pusey というのは最近の学長の名で，まだ生存中，とのことだった。この大学には，エマーソンホールとかレーマンホールとかいたる所に人名を冠した建物がある。この図書館は地図専門の図書館とのことで，出てきた専門の職員らしい二人が，大きな古地図を大テーブルに広げて実に丁寧に説明してくれる。奥に入って中国の地図をいろいろ調べてみると，何と，「極秘」と印された日本の参謀本部測量部作成の詳細な地図が何枚も出てくる。どうしてこんなものがここにあるのかと尋ねると，ワシントンから寄贈されたのだ，と言う。戦後，旧軍部から没収されて，やがてここに落ち着いたものらしい。中国から来た56歳の Yang（楊）先生は苦笑している。

ピュージー図書館から出たところで，突然，今までずっと英語で話していた案内役の Len 氏が，英語の不自由な Yang 先生とペラペラと中国語で話し始めたのでびっくりする。ハーバードの図書館員は中国語も話せるとは…。数分後，Len 氏といろいろ話してみると，自分は大学院で中国史を専攻し，博士号（Ph. D）も取ったのだ，父方が中国系アメリカ人だ，図書館のことで尋ねたいことがあったらいつでもどうぞ，と愛想よく言って，去って行く。

Yang 先生に，彼の中国語はどうですか，発音は，と尋ねると「ナカナカ，ヨロシイ」とたどたどしい日本語でニコニコしながら答えるので，また驚く。小学校時代，旧満州で日本語教育を受けたというのだ。先刻から黙っていた韓国のソウル大学から来た Noh（盧）氏，口を開いていわく，ああ，博士号を持った図書館員とは……すごい！ 日本の図書館員にも博士（ドクター）や修士（マスター）はたくさんいるのか？……と。どうも日・中・韓とも，大学図書館は建物も人員もハーバードに全然及ばない，と妙なことで意見一致した後，正午すぎの太陽とワイドナー図書館の太い石柱を見上げながら解散する。

×　　×　　×

アメリカ人は確かに「パーティー好き」である。東アジア研究所（Yenching Institute）に11箇月滞在していたが，パーティーは実によく開かれた。その中に，イェンチング図書館主催のものがあり，その趣旨は図書館員と教官・訪問学者・大学院生諸氏との親睦・情報交換とのことであった。

顔を出してみると，立食式で楽しくやっており，私も台湾出身の中国人で東大法学部を出たという副図書館長の頼氏といろいろ話す機会があった。増加する一方の蔵書にはイェンチング図書館も悩んでいるらしい。また，日本文学・日本史関係の書籍や雑誌は実によくそろえられているのだが，それでも資金不足は深刻だという。「何でも買う，というわけにはいかないのでね。」と頼氏は10年ぶりとかいう流暢な日本語で話す。それでも，ハーバードとほぼ同格の東部三大学，プリンストン・コロンビア・イェールの図書館と協定して，ハーバードで購入できなくとも，どれか一つの図書館では買ってもらうようにし，日本関係の書物はすべて四大学中のどれかにはある，という体制をこころがけている，と説明する。

図書館員の採用の話題に転ずると，図書館は独立した人事を行っており，我々は専門職なのだから当然だ，と答える。事実，図書館員の中には長年にわたり本を扱い続けるせいもあるのか相当に勉強好き・研究好きな人々がいるらしく，その後，私は東アジア関係の研究会で，しばしば彼等に出会ったものである。そして私の印象では，その人物が教官か研究者に見えてしまうことがあり，いろいろ話しているうちにようやく相手が図書館員と思い出せることもあった。彼等と補助図書館員（アシスタント・ライブレアリアン）ではかなりの差があるらしく，図書館の出口で出て来る人々のバックの中を検査したりする役目は後者のものであることも後に知った。

アメリカ人は日本人よりはるかに「あいさつ好き」であり，このパーティー以後，私はイェン

チング図書館にも行きやすくなり，顔見知りの人々にあいさつできるようになったから，なるほどああいう行事も意味のあるものかと悟ったのであった。

北の古典籍 ❷

蝦夷地における植物採集紀行

この数年，オランダのライデン国立腊葉館にドイツの有名な日本学者シーボルトがわが国から持帰った植物標本の保存されていることが紹介され，その中には蝦夷地草木の腊葉も含まれていることが話題となっている。後者の腊葉は，1826年シーボルトが江戸参府の折に親しく交際した著名な蝦夷地探検家最上徳内から贈られたものといわれ，現存する最古の蝦夷地草木の標本とみなされている。日本産植物の古い標本としては，すでに17世紀および18世紀中に来日したケンペルとツュンベリーのコレクションがそれぞれ大英博物館とスウェーデンのウプサラ大学に保存されていることが知られているが，時期的にみてそれらに中に蝦夷地植物の腊葉が含まれている可能性はなさそうである。それでは，シーボルトが持帰った蝦夷地産植物はどのようにして採集されたのであろうか。そのことに関連して今回は蝦夷地関係の写本のなかから，北海道や樺太における初期の植物調査の記録を紹介したい。

最上徳内は本多利明の門下で数学・測地学・地理学に長じ，数度にわたる蝦夷地全域の調査によってアイヌ民族の風俗習慣，言語に深い造詣をもっていたが，彼の諸著作からは博物学への関心はとくに察せられない。しかしシーボルトの『日本植物誌』にはトドマツやエゾマツの材の標本や図を徳内から贈られたことを記し，また『日本』の中でも北海道や樺太の腊葉や樹木標本を徳内から得たことをのべている。寛政4年（1792）徳内の樺太調査には幕府の西丸与力小林源之助が同行し，『蝦夷草木図』（写本には『蝦夷草木譜』，『蝦夷草花写真図』，『蝦夷地草木写生図』などあり）という彩色の図譜を著わしているので，その際には腊葉も作られたかもしれない。小林は絵をよくし，江戸出発に際して「地理・山川・海岸等且ツ人物及草木・鳥獣・魚類等ニ至ル迄具サニ」絵図を作成することを命じられていたので，彼の『蝦夷草木図』中には北海道西岸および樺太南部産の60種ほどの植物図が収められ，それぞれアイヌ語の名称と写生の場所，時期などが記されている。

蝦夷草木腊葉帖（1799年）
（北海道大学農学部植物図書室蔵）

上記の調査には本草学の専門家は参加しなかったが，寛政11年（1799）には幕府の奥詰医師兼薬園総管の渋江長伯一行が「採薬」のために東蝦夷地に派遣されて本格的な植物調査をおこない，図

譜のほか多数の腊葉を作成した。蝦夷地の薬草採集としては，すでに享保12～14年（1727～1729）に阿部照任と二階堂慎庵がそれぞれ採薬使として派遣されたことがあったが，寛政11年の場合は幕府が東蝦夷地を直轄しこの地方の経営に着手するために広く産物調査をおこなったもので，植物調査隊も34人という大がかりなものであった。このときは渋江長伯と彼の高弟土岐新甫のほか，「国風・人物・山水・器用・産物等」の図画のために谷元旦（谷文晁の弟）が参加し，それぞれ紀行（日記）を残している。長伯の日記は『東遊奇勝』と題する13巻の浩瀚なもので，谷元旦による各地の風景図を含み，その自筆本が現在では市立函館図書館に所蔵されている。谷元旦も『蝦夷日記』（写本には『蝦夷紀行』，『蝦夷秘録』，『蝦夷山川地理紀行』などあり）のほか，『蝦夷紀行図』2巻，『蝦夷奇勝図巻』その他の風俗風景図を著わした。土岐新甫の『東遊記』には肝心の蝦夷地部分が欠けているのは残念である。この紀行における植物調査の成果としては，谷元旦『蝦夷採薬草木図』2巻（254種）や土岐新甫『東夷物産志』（動植鉱物485種）のほか，採集された植物の腊葉そのものを和本仕立てに製本した『蝦夷草木腊葉帖』31冊（あるいは42冊ともいう）が残された。とくに最後の腊葉帖は，わが国に現存する最古の蝦夷地草木の標本ともいうべきもので，そのうち22冊が本学の農学部植物図書室に保管されている。それは植物学者として著名な故宮部金吾博士（昭和21年文化勲章）の旧蔵書である。各冊にはそれぞれ18種の腊葉が収められているので，残存するものだけでも約400種である。

ところで最上徳内は直接的にではないが，寛政11年の植物採集にも関係があった。谷元旦の『蝦夷日記』によれば，渋江長伯一行が厚岸からの帰途徳内はシャクヘツからオコツナイ迄彼らと同道し，終日蝦夷中のことを談じたことが記されている。また土岐新甫『東夷物産志』中の「シイチシホヤイ（ニウ）」の項に，最上徳内が「エトロフではこの種の植物の根に草の実をあわせて醸し麹となして酒を造る」とのべたことが記されているが，これもその折のことであろう。徳内は当時様似山道の開削を指揮していたのである。以上のように徳内は蝦夷地における2度の植物調査に立合い，その後も文化6年まで蝦夷地で活躍しているので，彼自身の腊葉コレクションをもっていたことも考えられる。

シーボルトの「江戸参府紀行」（『日本』所載）には，彼のもとを訪れた多くの学者，医師，役人たちがたくさんの腊葉を提供したことが記されているが，彼らの中にも寛政年間あるいはその後の植物調査における蝦夷地の腊葉をもっていた人はいなかったであろうか。とくに桂川甫賢は観賞用に植えていたエゾマツの開花している一枝を与えたというし（『日本植物誌』），彼が小林源之助の『蝦夷草木図』を所蔵していたことも知られている。尾張の植物学者水谷助六もシーボルトに種々の博物標本を贈ったが，彼は土岐新甫と同郷同門の友人で土岐から蝦夷地産物のことを聞き，腊葉を鑑定して『釣致堂随筆』に書きとめているほどである。いずれにせよ，シーボルトの蝦夷地腊葉は，蝦夷地関係の旧記や本学所蔵の『蝦夷地腊葉帖』などと対比することによって，多くの事実が明らかになるものと思われる。

（北方資料室・秋月俊幸）

昭和62年度補正予算における外国学術図書の購入について

学術研究の急速な進展にともない，文部省は各国立大学附属図書館に国際的に評価の高い外国学術図書の重点的整備を図る経費として，補正予算をもって総額約30億円の購入予算を計上された。

それに伴い，本学においては購入予算額約6，300万円の示達があり，図書館委員会で検討の結果，通常経費で購入不可能な高価な学術研究図書を各部局より推せんしてもらい，それを基に選択し購入することになった。

今回の外国学術図書の整備に当たっては，地区の拠点図書館（地区センター館）が置かれている全国13大学を中心に予算配分され，外国学術図書の網羅的・効果的な整備を促すとともに，学内での共同利用はもとより北海道地区および全国大学間でもできるだけ共同利用が図られるよう，各附属図書館または分館に配架し閲覧に供することになっている。

購入図書は，170種約5，670冊で今年3月下旬までに納入完了される予定である。

下記に主なもの数点をあげておく。

なお，当大学においては図書館委員会に諮り決定したものである。

記

1. Studies in Logic and the Foundations of Mathematics. Vol. 80 − 121　1973 − 1987
2. Erziehungswissenschaft. −Russland und Osteuropa− Vol. 1 − 17　1986
3. Collection de Brochures et de Livres Relatifs a la Revolution de 1848. 110. Books.
4. United States Treaties and Other International Agreement. 104 Vols. 1950 − 1980
5. Chemical Abstracts. 11 th Collective Index. 93 Vols. 1987
6. Encyclopedia of Medical Radiology. 20 Vols. 1965 − 1985
7. Comprehensive Organic Chemistry; the Synthesis and Reaction of Organic Compounds. Vol. 1 − 6　1980
8. Powder Diffraction File. Sets. 31 − 36 Inorganic
9. Comprehensive Insect Physiology. Biotechnology and Pharmacology Vol. 1 − 13 1985
10. Dictionary of Antibiotics and Related Substances. 1987
11. Elsevier Oceanography Series. 34 Vols. 1986
12. Dictionaire de l'Academic Francaise. 4 Vols. 1694 − 1695
13. Urban Studies. 36 Vols. 1986 − 1987
14. Graduate Texts in Mathematics. 53 Vols.
15. Nucleotide Sequnces. 8 Vols. 1986 − 1987
16. Russian Studies: a Catalogue of British Theses. 89 Vols. 1971 − 1986
17. Computer Science and Scientific Computing. 43 Vols. 1971 − 1986
18. Handbuch der Speziellen Pathologischen Anatomic und Histologie 38 Vols. 1970
19. Dictionary of Organometallic Compounds. 3 Vols. 1987
20. The British Library General Catalogue of Printed Books. 26 Vols. 1982 − 1985

（整理課）

◆ 会　　議

第136回図書館委員会

〈と　き　昭和63年1月26日㈫〉
〈ところ　附属図書館会議室〉

議　　題

1．概算要求の方針について
2．その他

第93回教養分館委員会

〈と　き　昭和63年1月22日㈮〉
〈ところ　教養分館会議室〉

議　　題

1．昭和63年度教官指定図書の選定について
2．その他

図書担当掛長会議

〈と　き　昭和62年10月27日㈫〉
〈ところ　附属図書館会議室〉

議　　題

1．外国学術図書の購入について
2．その他

昭和62年度国立大学附属図書館事務部長会議

標記会議が昭和63年1月28，29の両日にわたって，千葉大学の当番で開催された。この会議は，事務部制をしく，国立大学附属図書館の事務部長をもって組織されているもので，毎年1回開催されており，当館から酒井事務部長が出席した。

なお議題は，次のとおりである。

1．外国学術図書等の整理について
2．ファクシミリの図書館活動利用について
3．四週六休制への対応について
4．図書館業務の委託について
5．各大学所蔵資料のそ及入力について
6．外国学術図書の購入（昭和62年度補正予算によるもの）について
7．図書館事務組織の再編整備について
8．NACSIS－IRの導入について
9．開庁方式による四週六休制と大学図書館の利用者サービスについて
10．その他

◆ 研　　修

昭和62年北海道大学図書館講演会

この講演会は，毎年秋に実施している図書館職員講習会を，講演会に名称を変えて実施したものである。本講演会の趣旨としては，本学の図書館職員に対して，学術情報センターに対応した学内及び北海道地区における学術情報ネットワーク形成に資するとともに，図書館職員としての資質の向上を図る目的で行われたものである。

参加者は，本学図書館職員50名，北海道教育大学3名，北見工業大学2名，室蘭工業大学，帯広畜産大学，小樽商科大学，旭川医科大学，旭川工業高等専門学校から各1名であった。

なお，講演会の日程は次のとおりである。

講演会日程

昭和62年11月17日(火)
北海道大学附属図書館会議室

9：20～9：50	受　付	
9：50～	開会挨拶	北海道大学附属図書館長　大野公男
	講師紹介	〃　事務部長　酒井　豊
10：00～12：00	講　演	「自然科学の古典について」 北海道大学教授 （附属図書館教養分館長）高田誠二
12：00～13：00	休　憩	
13：00～15：00	講　演	「Bibliographerについて」 国立国会図書館総務部司書監　石山　洋
15：00～17：00	講　演	「外国の図書館事情について」 中央大学文学部教授　今　圓子
17：00	閉会挨拶	北海道大学附属図書館　事務部長　酒井　豊

第一回国立大学図書館協議会シンポジウムに参加して

村上　豊

本シンポジウムは，昭和62年12月10日，11日の2日間，東京大学附属図書館で開催された。一日目は東工大，倉橋事務部長，2日目は一橋大上島事務部長の司会で始まり，活発な意見が出された。以下，討論内容を私的に要約してみた。

1．図書館事務に於けるシステム化の必要性

近年，学術情報資料の急激な増加と多様化に伴い，大学図書館本来の図書館サービスが困難な状況に落ち入り，利用者のニーズに応えられなくなって来た。その為大学間の相互補充的協力関係はもとより，図書館業務の整備・改善，特に業務の省力化が大きくクローズアップされ

て来た。以上のような要請の中から，学術情報センターを中心とする，図書館ネットワーク構想が確認された。

2．全国総合目録構築の重要性

新収洋書総合目録が1988年以降，編さん，刊行が困難になった今，大学図書館に於いて利用者への学術情報提供サービスを強化して行く為には，資源共有の理念をもとに，高度な情報システム，すなわち，学術情報システムに各館が積極的に参加し，全国総合目録の構築に寄与すべきである。この総合目録データベースは図書館ネットワークの共有の財産であるから，ILLへの使用はもとより多面的利用方法により図書館業務システム化への推進役となり得る。

3．目録業務省力化と情報サービス改善の必要性

学術情報センターの目録システムを利用し，目録業務を省力化し，全国総合目録データベース形成と同時に，各館に於ける新しい目録情報提供システムを改善し，オンライン利用者用目録（OPAC）とすることは，従来の目録情報提供に比べ，迅速かつ容易な検索法が可能となり，更には，編成作業が不要となり，及ぼす効果は計り知れない。このことは，図館館ネットワークの上で，ILLによる広汎な目録サービスが期待できる。

以上，3点に要約して見たが，結論的には，各館の学術情報センターへの積極的参加が，全国総合目録を構築するだろうし，その形成されたデータベースを基に，各館自体のデータベースを整える。その為には，まず目録業務を最優先し，ハウスキーピングの凍結，カードレスとし，取り敢えずは，質より量を増大させる。このことが，大学図書館本来の図書館サービス，しいては，利用者のニーズに応える結果となるということであろう。現時点では，各館共諸事情が，多々あると思うが，「我々図書館員の使命は」という初心に返り積極的に参加していこうということだった。

2日目の現物貸借に関しては，特に異論はなかったが「互恵の原則」という語句が注目された。このことは，中小規模大学であっても，メーンなるものが存在すれば，自信を持って借りてかまわないということであった。その他の案としては，基本料金千円＋α（人件費），貸出日数20日，30日（検討事項），様式C票が手元に残るような方法，料金一括処理等の問題が出されたが，いずれも懸案事項となった。

2日間通してのシンポジウムは，私がこれまで出席させていただいた会の中でも特に意義のある一つであったし，親睦会に於いても多くの友人を得ることができた。このことについては，東工大の山田課長，北大の酒井事務部長，似鳥，石黒，益田の各課長，中でも北大理学部藤井事務長・森事務長補佐には，この紙上を借りて感謝する次第です。

（理学部図書掛）

NACSISとCLARKとの間で

── 昭和62年度第1回総合目録データベース実務研修を終えて ──

菅　原　英　一

本研修は，昭和62年11月6日から12月3日までの4週間，講師養成を目的として学情セン

ターで行われ，全国16大学（私立2を含む）から16名が受講した。北大のように既に業務として成り立っている大学もあれば，これから学情センターとの接続を予定している大学もあり，全国の多様な実態を反映した学情システムらしい研修だったように思う。

プログラムは大きく4つから成り，（1）教官による学情システム全般にわたる講義，（2）NCデータの点検と登録実習，（3）参照マーク変換に関する解説・実習，（4）講習会実施の要領，と，3日間の講習とは比較にならない密度の濃いものであった。

現在，学情システムのなかでの総合目録データベースの占める位置は変わってきており，shared cataloging による書誌所在情報データベースの構築という理念を保持しながら，新しい段階を迎えようとしているように感じた。それは，図書の所蔵登録件数が，昭和61年の約3万3千件から昭和62年には約29万件へと飛躍的に増大し，また，接続大学数も46大学（昭和62年12月2日現在）に拡大していることにも現われている。そして，このことに伴って，データベースの品質管理や書誌作成の標準化の問題など当初予想されていたことが，正に問題として現実化していることも事実である。（このことへの早急な対策を学情センターとしても考えているようではあったが）

しかし，様々な問題点を内在させながらも，総合目録データベースはその本来の意味を顕在化しつつある。それは，一つには，世界へ向けてのデータベースの創出ということである。すなわち，現在参照ファイルとして導入されている各種マーク（JP，TRC，LC，UK）が質量ともにNCファイルを上回っているという事実は否定できないとしても，将来マークを凌駕しうるかも知れないということも単なる夢想として片付けるのではなく，各種マークを統合化したデータベースであることの意義はその方向へ見出すべきである，ということである。二番目には，日本で唯一の書誌ユーティリティとしての利用者へ向けての本格的なサーヴィスが開始されそうだということである。現在NACSIS－IRに収納されているのは，目録所在情報としては和洋の雑誌のみであるが，昭和63年度には図書目録DBの搭載も予定されていると聞く。そのようになってはじめて，利用者へ解放された図書館目録と言えるわけで，私たちも，そのことを念頭に置きながら，利用されやすい書誌情報の作成に努力しなければならない，ということを今強く感じている。

それにしても，学情センターの人たちの底なしのヴァイタリティと情熱には驚嘆させられた。「センター」で仕事をしており，全国の図書館員を領導していく立場にあるから当然である，という見方も成立するかも知れないが，ローカル・システムを通してでは中々見えにくい苦労のなかで悪戦苦闘している姿から学んだことは多かった。

ただ，4週間の研修期間を通して，全国的には過渡期を体験しているオンライン目録が，北大では恐らく安定期に入っており，理論的に裏づけされた設計思想の確かさを改めて感得できたことは大きな収穫であったように思う。そのことは，北大だけが「総合」目録データベース形成へ向けてのオンライン遡及入力を実現させていることをもっても理解され得るはずである。

最後に，このような有意義な研修の機会を与えてくれた学情センターの人たち，職場の上司及び同僚の方々に，紙面を借りて感謝の意を表し，この稿を終えたい。

（整理課目録掛）

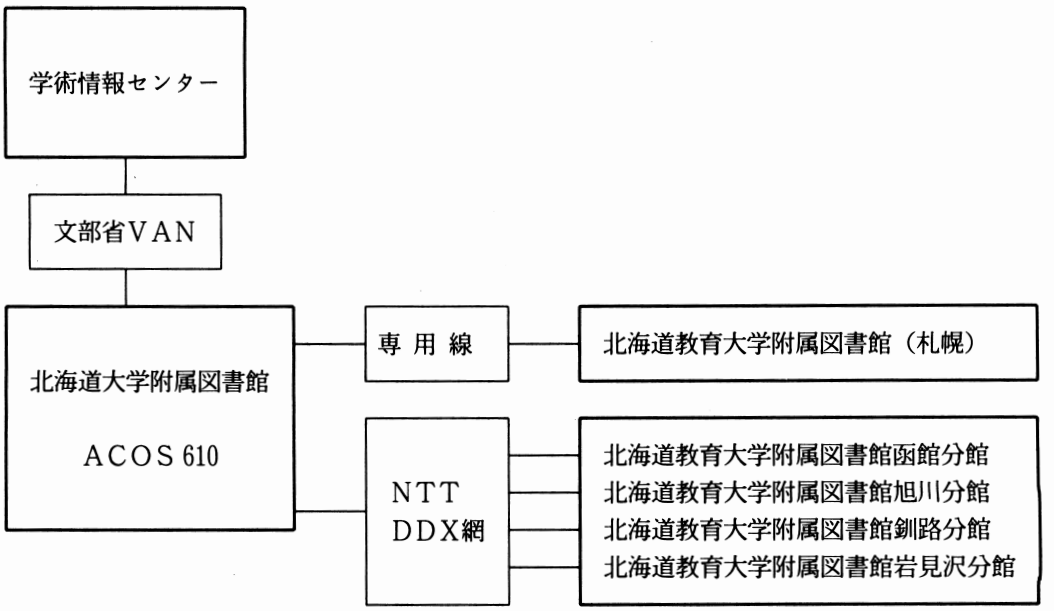
◆　電算化ニュース

北海道教育大学とオンラインシステムの接続開始

北大図書館オンラインシステムに北海道教育大学図書館が接続されました。これは学術情報システム地域ネットワーク構築の一環として学術情報センターの目録所在情報を共有するものです。昭和63年2月1日から稼働を開始しました。

これによって，北大と北教大は北大図書館設置のACOS 610を通じて学術情報センターとに目録を登録すると同時に北大図書データベースを共に形成していくことになりました。オンライン検索したとき所在が「北教大・」で始まるものは，北海道教育大学の蔵書です。

システム構成および接続形態は下図のとおり。



部　会　報　告

システム管理部会報告

昭和62年度 第2回　昭和62年10月28日（水）

1．北大DB一斉点検結果報告

書誌データの削除・修正296件。検索語の修正は検索語リストをもとにストップワードの点検を中心に実施した。

2．ストップワードについて

北大DB一斉点検作業の結果，ストップワードについて共通の理解を担当者に徹底する必要があると思われるので，次回文書にして配布することとした。

3．NACSIS－IR（学術情報センター）検索は検索専用端末（パソコン通信等）で行うことが望ましい。図書館端末は常時北大蔵書検索に提供しておくこととNACSIS－IR検索に使用

した場合データの表示時間がかかり検索専用端末にくらべて使い勝手がよくないことによる。

4．パソコンによるCLARK検索システム

学内回線を使用して研究室・図書室等からパソコンで「蔵書検索システム」を利用するシステムを開発する。なお，接続可能なパソコン・周辺機器の種類・構成は当面限定される。

5．100台一斉稼働テスト

VIS業務（学内オンラインシステム）に使用する70台とUIP業務（学情センター接続処理）に使用する30台それぞれ分けての稼働は保証された。ただし100台同時稼働（100名同時使用）時には優先度を低くしているUIPのレスポンスに影響が出た。

6．北海道教育大学との接続

学術情報ネットワーク構築の一環として昭和63年2月から接続し，北大システムの安定稼働を前提にして学情センター目録所在情報対応部分を共通に使用する予定である。

図書情報システム運用部会

昭和62年度 第3回　昭和62年11月26日(木)

1．議　　題

(1) 北大DB一斉点検結果について

2．報告事項

(1) NCID未付与集合書誌リストについて

(2) 「配列順序の与え方」の改訂について

(3) 「検索語自動切りだし編集規則」について

(4) ストップワードリストについて

(5) 附属図書館における「DC 19版運用に際しての原則」について

(6) 学情目録システム仕様変更に伴う北大目録仕様変更について

(7) 直通型ケース2について

雑誌情報システム運用部会

昭和62年度 第3回　昭和62年12月23日(水)

1．北海道大学雑誌総合目録について

2．システム改善について

サービスシステム運用部会

昭和62年度 第3回　昭和62年1月27日(水)

1．議　　題

(1) 「北海道大学蔵書検索の利用案内」の作成について

2．報告事項

(1) ストップワードリストについて

(2) システムの機能改善について

電算化記録（6）

昭和62年10月～63年1月

年月日	事　　項
62.10. 1	山田学情課長東工大図に転任，後任に京大図より益田課長着任
62.10. 8	朝，雷雨のため瞬停，午前中VISのみ使用中止
62.10. 9	日本電気との定例打合せ会議（第29回）
〃	第4回北教大との接続に関する定期協議会
62.10.16	サービス運用部会主催で「NACSIS－IR」の講習会開催
62.10.22	学情セから「RDB1目録システム運用テスト」に協力要請あり，14時から約1時間25台が協力
62.10.28	第2回システム管理部会
62.11. 4	(学情セ) UIPデータ登録時の著者名リンクがオプションに変更
62.11. 6	日本電気との定例打合せ会議（第30回）
〃	第5回北教大との接続に関する定期協議会
62.11.19	第5回遡及入力打合せ会議
62.11.25～27	「学術情報流通システム（文部省VAN)」の説明会（学情セ）に益田学情課長が出席
62.11.26	第3回図書情報システム運用部会
62.12. 4	日本電気との定例打合せ会議（第31回）
〃	第6回北教大との接続に関する定期協議会
61.12.14	(学情セ) UIPデータ登録時の3階層構造を2階層処理に変更
62.12.23	第3回雑誌情報システム運用部会
62.12.24	臨時システム管理部会，プログラム修正要求事項検討
63. 1. 6～7	NEFSにより学内端末一斉保守点検実施
63. 1.12～13	科研費による調査のため，学情セの安達・橋爪・大山助教授，図書館情報大の松村教授来館
63. 1.19	部課長会議で，63年度遡及入力計画について検討
63. 1.21	第7回北教大との接続に関する定期協議会
63. 1.27	「学術情報ネットワーク（文部省VAN)」北大と接続
63. 1.27	第3回サービスシステム運用部会

データベース登録件数

（昭和63年2月2日現在）

1　北大DB登録雑誌書誌件数

和雑誌 15,462件	洋雑誌 14,728件	計 30,190件

2　北大DB登録図書書誌件数

和書書誌　60,052件	計104,007件	(DB登録総冊数)
洋書書誌　43,955件		153,462冊

◆ 受贈図書

本学教官著作物

〔本　館〕

○法　学　部

渡　部　保　夫	刑事裁判ものがたり　潮出版社　1987
今　井　弘　道(共著)	現代市民社会の施回　平田清明等編　昭和堂　1987

○理　学　部

高　田　誠　二	実験科学の精神（科学精神の冒険１）　培風館　1987

○工　学　部

中　山　恒　義	異常なカピッツァ抵抗（物理学最前線 16）　共立出版　1986

○農　学　部

七　戸　長　生	日本農業の経営問題　北海道大学図書刊行会　1988

○獣　医　学　部

菅　野　富　夫(共著)	The paraneuron. Springer-Verlag, 1988

○図　書　館

秋　月　俊　幸(訳)	ロシア人の日本発見　S.ズナメンスキー著　新装版　北海道大学図書刊行会　1986

〔分　館〕

○理　学　部

高　田　誠　二	実験科学の精神（科学精神の冒険１）　培風館　1987

○言語文化部

中　野　美代子	敦煌物語（中国の都城３）　集英社　1987

◇人事往来◇

○採　用

石　井　　進	整理課受入掛	62. 11. 1

北海道大学附属図書館報「楡蔭」　（通巻 74 号）
1988 年 2 月 29 日　発行　　発行人　酒　井　　豊
編集委員　　遠　昭二（長）・久原秀志（図）・山口國雄（図）・高砂　慶（図）・片桐和子（文）
　　宇野洋子（理）・伊藤秀治（獣医）
発 行 所　　北海道大学附属図書館　　札幌市北区北 8 条西 5 丁目　　電話代表 716－2111（2967）
印 刷 所　　㈱ 共 同 印 刷